

Title	「デハ」の機能：推論と接続語
Author(s)	浜田, 麻里
Citation	阪大日本語研究. 3 P.25-P.44
Issue Date	1991-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/7999
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「デハ」の機能

——推論と接続語——

A Functional Analysis of *DEWA*: Inference and connectives

浜 田 麻 里

HAMADA Mari

キーワード：接続詞，新しい情報，推論，条件節，転換

1 はじめに

1-1 問題のありか

「デハ」は「転換を表す接続詞」と呼ばれることが多い。それは「デハ」が次のような文脈によく現れるからだと思われる。

- (1) a では，次のニュースです。
- b では，ただ今より会議を始めます。
- c じゃあね。（別れの挨拶として）

しかし、「デハ」には次のようなものもある。

- (2) 山村「先生あの時どこにいらした。」

西村「仕事してました。」

山村「証人は？」

西村「いませんよ。ひとりで原稿書いていたもん。」

山村「じゃ先生にはアリバイがない訳だ。先生か先生の彼女が怪しいことになりましたね。」

（『ピ』）

例から明らかなように、「西村のアリバイ」という話題は「デハ」の後で

も変わることなく続けられている。このような「デハ」まで「転換」という分類の枠の中にとじ込めてしまうのは無理があるのではないか。

また、「デハ」が「転換」の接続詞のひとつである「トコロデ」などと異なることは次の例で「デハ」と「トコロデ」を入れ替えることができないことから明らかである。

(3) 「久しぶり、元気？」

「うん。相変わらず、仕事に追われてるけどね。」

「こっちもそんなところ。ところで、今度の土曜日、忙しい？」

「うーん、ちょっと予定がはいってるんだけど。」

「じゃあ、日曜日は？」

「デハ」が「転換」以外の機能も有するならば、それは何か。そして、「デハ」の本質はいったい何なのだろうか。

1—2 接続語句の研究史

さて、詳しい議論に入るまえに、従来「接続詞」あるいは「接続語句」とよばれる一群の形式がどのように研究されてきたかを概観してみよう。

従来の国語学の中での接続語句に関する研究は「品詞論的アプローチ」と「文章論的アプローチ」の二つに大別できる。

「品詞論的アプローチ」については特に井手（1973）が詳しい。このアプローチにおいては、接続成分をひとつの品詞として認めるべきか否かという議論が中心である。すなわち、接続詞の本質を明らかにすることよりも品詞体系を打ち立てることに重点が置かれた研究であった。

さて、日本語における文章論が時枝誠記によって確立されたとするならば、「文章論的アプローチ」も時枝に始まったと言えよう。以来、文章論では文がどのように接続するかを明らかにするため、文と文の接続の仕方の類型化が行われてきた。市川（1962）では、接続詞は「文と文の接続関係を直接的に示すもの」として接続のタイプの分類と表裏一体の形で分類されている。

いずれのアプローチにおいても、いわゆる接続詞が談話の中で果たす機能は何か、という問いに対して抽象的な答えしか与えることができない。そ

これは具体的な形式のひとつひとつに立ち入った分析が行われていないためであろう。接続詞の全体像を明らかにするためには各論による基礎固めがどうしても必要なのである。最近ではこの部門の研究として北野(1989)、山森(1989)、蓮沼(1990)などが見られるようになった。

もうひとつの問題は、これまで書き言葉の分析が主になってきた点にある。人間は言語によって意思を疎通するのだが、情報のやり取りがもっとも生き生きと行われるのは話し言葉であると考えられる。言語を記述する動機のひとつは人間が言葉を如何に駆使し、意思を伝え合っているのかを明かにすることであろうが、その目的を達成するためには話し言葉の構造、すなわち発話同士がどのように結束しているのかを記述することが必要になる。このように考えていくと、話し言葉においていわゆる接続詞の果たす機能を明らかにすることの意義が理解されると思う。

さて、以上のような課題を克服していくために、これまで主に談話分析の分野でなされてきた研究が参考になるだろう。なかでも Halliday & Hasan (1976) の「結束性 (cohesion)」の研究や Schiffrin (1987) の「ディスコース・マーカー (discourse marker)」の分析などは方法論において非常に有益な示唆を与えてくれる。

1-3 接続語とは何か

ここまで、慣例に従って「接続詞」という呼び方を用いてきたが、その機能を明らかにするという目的のためには、品詞の枠組みは便を欠く。

例えば、

- (4) a では、次に行きましょう。
- b さあ、次に行きましょう。
- c ということで、次に行きましょう。

「デハ」は接続詞に分類するのが妥当なところであろうが、「サア」は感動詞という説が一般的であろうし、「トイウコトデ」は一語と認めるには問題がありそうだ。しかし、例に示したように、この三つの形式はその機能という点ではかなり似通っているのである。

そこで小論では、品詞の枠組みを越え各接続形式の談話に於ける機能を

重視するという観点に立脚し、発話と発話を繋ぐ形式をすべて「接続表現」と呼ぶことにする。これにはいわゆる接続助詞、接続詞、感動詞、副詞などのほか、(4c)のように一語と認めるかどうか異論がありそうなものも含む。このうち、接続助詞を除いた形式を「接続語」としよう。今の段階ではまだ「接続語」に含まれる形式と含まれない形式を明確に区分して一覧にすることはできない。将来、研究が進めば、もう少し基準を精密化することができるかもしれない。

さて、「デハ」と類似の機能を持つ接続語には

ソレデハ、ナラ、ソレナラ、ソウンタラ、ダッタラ、ソレダッタラ、
スルト、ソウスルト¹⁾

等と各々の縮約形(例：それでは→それじゃ)がある。これらはすべて(2)の「じゃ」との置換が可能である。

これらの接続語は、その出自をさかのぼれば、いわゆる「条件節」またはその一部の転用から出来たものと考えられる。以下、本文中ではこのような条件節系の接続語を「デハ」系接続語と呼ぶことにする²⁾。後に詳しく述べるように、「デハ」系接続語の中で最も用途が広いのが「デハ」である。そこで、暫くの間「デハ」によって「デハ」系接続語を代表させ話を進めて行こう。

2 「デハ」の分析

2-1 「デハ」の本質

最初に「デハ」の本質は何かを明らかにしておく必要がある。そのために、まず「デハ」の現れる文脈を分析することから始めねばならない。

- (5) 石原「なんというか、非常に神経の過敏な、デリケートな人間に限ってね、ライティングのときに左から右へ矯正すると視神経障害を起こすんだ、とアメリカの専門医に言われたことがあります。」

赤瀬川「なるほどね、だとすると、ぼくの場合は矯正した結果、おねしょになったんじゃないかな、もちろんこれは独断ですが。いや、そうとしか考えられないな。」

(『ピ』)

(5)の例を対話の進展に従って検討してみよう。まず、赤瀬川は石原から左利きの矯正が障害を引き起こすという、それまで知らなかった事実を聞かされる。「なるほどね」と石原に反応しているのがそれである。そして、赤瀬川は新たに知った事実を自分の体験に結び付け、自分のおねしょの原因を推察する。それが「だとすると、……じゃないかな。」という発話である。続く発話は「もちろんこれは独断ですが。」となっており、前の発話が赤瀬川自身が行った推論の内容を表したものであることを示している。すなわち、この会話における赤瀬川は石原がもたらした情報を自分の知識体系に取り込むのみならず、既存の知識に照し合せて新たに推論を行っているのだということになる。

このように「デハ」系接続語の現れる文脈を数多く集めて分析してみると、そこには二つの共通した特徴が見られる。ひとつは「新しい情報」の入力があること、そしてもうひとつは新しい知識と既存の知識との突き合わせによって日常的な意味での「推論」が引き起こされていることである。坂原(1985)は推論を「前提と呼ばれる命題の集合から、ある命題を結論としてみちびきだすこと」と定義している。「デハ」の場合、前提となっているのは新しい情報と既存の知識体系ということになる。詳しくは後に述べたい。

さて、「新しい情報」と「推論」の関連性は人間の情報伝達活動が次のような特徴を持つことと関係付けて解釈することができるだろう。情報の交換というものは人と人が会話を行っている時、対話の参加者の間で絶えず行われている。しかし、新しい情報を受け取った時、聞き手は、多くの場合それをそのまま知識として温存するだけでなく、その情報を基にしてさらにできるだけ多くのことを知ろうとする。そうして「推論」を行うのである。

さらに、新しい情報が状況が変化したことを告げるものであれば、その変化を無視しない限り、人間は何らかの対応をするであろう。対応とは自分の態度を表明したり、周囲の環境に対して働きかけを行ったりすることを含む。このように新しい状況にどう対処していくかを決定する時、基礎

となるのは情報の分析である。つまり、新しい前提を踏まえて、どのよう
に行動するのが適切かという「推論」を行うことが必要になってくる。す
ると、この場合もやはり、新しい情報の入力をきっかけとする推論が行わ
れているということになるのである。

以上をまとめておこう。新しい情報が入力された時、普通人間は、推論
を行い、周囲への働きかけ等、積極的反應をする。その時現れるのが「デ
ハ」系接続語なのである。従って、「デハ」の本質とは、新しい情報を受
け取った時に生起する推論に基づく積極的反應である、とすることができ
よう。

2-2 新しい情報とデハ

ここでは「デハ」が新しい情報に対応して現れるということをめぐる
もう少し詳しく考察を加えてみたいと思う。

「デハ」系接続語の直前の発話が聞き手、すなわち「デハ」のあらわれ
る「デハ」発話の話し手にとって新しい情報であるということは、上でも
示したように「デハ」の直前に「なるほど」や「そうですか」を挿入する
ことが可能であることにより検証できる。「なるほど」や「そうですか」
は、新しい情報を受け取った時に現れる³⁾発話だからである。

(2) 山村「証人は？」

西村「いませんよ。ひとりで原稿書いてたもん。」

山村「そうですか。じゃ先生にはアリバイがない訳だ。先生か先生
の彼女が怪しいことになりましたね。」

(6)は妻が買物に出かける前に、夫に来客の時間を尋ねている場面の会話
である。ここにも「デハ」が見られる。

(6) 「何時ごろ来るかしら、桃子さんたち…」

(略)

「お昼からって言ってたから、3時頃じゃないか…」

「じゃ、急いで行って来るわ」

(『金』)

妻は来客の時間がわからないからこそ質問しているのであり、問いに対す
る答えは当然妻にとって新しい情報である。もし、妻が来客の時間を知っ

ている文脈を想定すると、次のようなやりとりになるだろう。

(6)' 夫「何時ごろ来るかなあ、桃子たち…」

妻「お昼からって言ってたから、3時頃じゃないかしら…」

{ *じゃ, } 急いで行って来るわ
 { だから, }

(6)'の「じゃ」はもはや(6)とは異なる意味を持ってしま⁴⁾う。既知の情報を受け取った時には(6)の意味での「デハ」は用いることができないからである。(6)のような文脈では「急いで行って来るわ。」という発話は発話時以前に行われた「推論の報告」という形をとって現れ、その場合には「だから」が用いられる⁵⁾。

独話(monologue)と対話(dialogue)を区別して考えなければならぬということは夙に指摘があるが(例えば Schiffrin 1987), 両者の違いのひとつとして、対話では情報のやりとりが絶えず行われていることが挙げられる。当然「デハ」は対話に類出する。もっとも、独話でも「デハ」系接続語が現れる例はいくつか考えられる。

まず、次のように一見独話であるように見えても、実は架空の相手からの質問を想定して話し手ひとりで対話の形式を演じているというようなものがあるが、これは特殊な例外とみなし、議論の外においてもかまわないだろう。

(7) 野田：ですから、見ている人間より先に謎をつくってそれで引っ張っていくという作り方が、いまいちばん忘れられている。だからこそそのやり方が、また新たに面白がられているんだと思いますね。ぼくは、そのつくり方を選んでるんだと思うんです。じゃ、子供からお年寄りまでというつくり方が絶対に悪いかという、そうじゃない。(『若』)

もう一つは、次のように思考の発展過程を言語化した場合で、最後の結論を述べた部分に「デハ」が見られる。

(8) アリバイがないのは田中と鈴木だ。しかし、鈴木には英子を殺す動機がない……。では、犯人は田中か。

この例で、「デハ」の直前の発話「アリバイは……動機がない」は、明らかに話者が以前から知識として有していたものである。このような文脈にも「デハ」が現れるということは、ここで「新しい情報」ということの意味を問い直す必要があるということになる。

さて、(8)の「デハ」の直前の発話の内容は長期記憶から意識下に呼び出されたものであり、話し手が「犯人は田中か」という結論を導き出すための前提の一部を形成している。言わば(8)における「デハ」は直前の発話を推論の前提として取り立てる役割を果しているのである。つまり、新しい情報でなくとも、新しい前提として推論を導ききっかけとなる情報・命題があれば、「デハ」は現れる。既知の事実を新たな視点から捉え直し、「推論」が行われるならば、「デハ」系接続語が現れる必要条件は整ったことになるのである。

2-3 情報の様態

「デハ」が現れるのは新しい情報の直後であることを前段で論じたが、新しい情報には様々な様態のものがあることにここで言及しておきたい。

次のような応答はごく自然である。

(9) A「すみませんが、少々お待ちいただけますか。」

B「じゃ、また出直します。」

(10) A「次の研究会はいつですか。」

B「じゃ、まだ連絡が行ってないんですか。」

ところが、普通は命令・依頼表現や質問表現に対して「デハ」を用いてまともに応答することはできない。

(9)' A「すみませんが、少々お待ちいただけますか。」

*B「じゃ、はい。」

(10)' A「つぎの研究会はいつですか。」

*B「じゃ、来月の14日です。」

「デハ」を用いて応えることができる(9)・(10)とできない(9)'・(10)'の違いは何なのだろう。

(9)~(10)'の「デハ」の発話を誘発することになった直前の発話は、それ

それ依頼の発話と質問の発話である。命令・依頼、質問などの発話は聞き手に行為あるいは情報を要求する発話で、これらの発話に対しては相手の要求するものを与えるのが最も理想的な対応であると考えられる。つまり、「待ってくれ。」という命令・依頼には「はい。」と言って待つこと、「いつか？」という問には「来月の14日です。」と相手の求める情報を与えるというのが最適のやりとりなのである。

ところが、(9)・(10)における「デハ」発話の内容を検討してみると、相手の発話による行為あるいは情報の要求に直接応じているわけではない。これらの例におけるBの「デハ」発話は、相手の要求的な発話から「Xを要求している」というメタ的な情報を読み取った反応である。具体的には(9)では「話者Aが待ってくれと依頼している」ということから「忙しいのなら出直した方がよいだろう」という結論に達したのであるし、(10)においては、「研究会の日時についての情報を求めている」というところから「相手に研究会の日前についての情報が欠けている」という推論が行われたのである。

これらの例は単に要求的発話の応答に「デハ」が使われにくいという現象を示すにとどまらない。もっと注目したいのは、言語的情報だけでなく非言語的情報も「デハ」発話を誘発することがありうるということである。非言語的情報も新しい情報には変りなく、推論の起こるきっかけとなるのである。

非言語的情報を受け取った場合の話し手の反応を示す例をもうひとつ掲げておこう。

(11) 言い争いになりそうになったので、みどりが慌てて言った。

「じゃ、いいわ。置場所、うちの前でいい、それでいいわよ」

話し手の目の前には「言い争いになりそうだ」という状況が存在する。そしてそのことが「デハ」発話を導く前提となっている。

このように日常の談話では言語化された話し手の発話の直接の内容だけではなく、(9)・(10)の例のような「発話を行っていること」自体を含むあらゆる言語的、非言語的情報が推論の前提となることができるのである。ま

た、そのような微妙なずれが人と人の会話の妙を生むのだとも言える。

冒頭に挙げた例も非言語的な文脈を考慮に入れると、うまく説明することができる。

- (1) a では、つぎのニュースです。
 b では、ただ今より会議を始めます。
 c じゃあね。

これらの例は、非言語的情報が「デハ」発話を導いている典型的な例である。(1a)ではひとつのニュースが終ったこと、(1b)では会議を始める時間になったことという状況の変化、つまり新しい状況の出現が、次の行動を起こすのが適当であるという推論を引き起こし、行為開始の宣言と共に「デハ」発話が現れるのである。

従来「デハ」が新しい情報に応じて用いられることがあまり注目されなかったのは、(1)のような例が重視されてきたことに原因がある。実際には状況の変化という新しい情報が入力され、推論が行われているにもかかわらず、その情報が非言語的であるため、情報の入力が明示的でない。とりわけ(1c)では「デハ」の後項、つまり推論の結論を表す部分も省略されており、あたかも談話における局面の変化だけを示すような用いられ方をしている。これが「デハ」系接続語が「転換」を表す接続語と呼ばれて来た所以ではないだろうか。

2-4 「デハ」と推論過程

「デハ」には「転換」という呼び方が的外れではないものもあることは事実だが、その本質は推論にあることはこれまで論じて来た通りである。そこで、「デハ」と推論の関わり方をもう少し詳しく知るためにその推論の過程を後付けてみることにする。

- (12) A 「山口さんて、15歳までニューヨークに住んでたんだって。」
 B 「じゃあ、英語ができるんだろうね。」

(12)の場合「山口さんは英語ができる」という結論を導き出すための前提となるのは、まず第一に直前の話者Aの発話「山口さんは15歳までニューヨークに住んでいた」であるが、さらに、既存の知識が関与することを忘

れてはならない。それは、例えば「ニューヨークで言語形成期を過ぎた者は英語ができる」という知識・信念である。まとめると次のようになる。

既存の知識(大前提)「ニューヨークで言語形成期を過ぎたものは英語ができる」
新しい情報(小前提)「山口さんは15歳までニューヨークに住んでいた」

「では」発話(結論)「山口さんは英語ができる」

よって、もし話者Bが「思春期をアメリカで過ごした者はアメリカ人のような明るい性格になる」という信念を持っていれば、「じゃあ、性格明るいだろうね。」という推論を伝達するかもしれない。また、「ニューヨークは犯罪の多い街だ」という知識を持っていれば、「じゃあ、いろいろ怖いめにあってるだろうね。」という応答もありうる。

確かに、新しい情報の入力には推論のきっかけとなるが、推論の前提として働くのは新しい情報だけでない。既存の知識も前提として重要な役割を果たしているのである。

3 談話に於ける「デハ」の機能⁷⁾

現実の談話において「デハ」は様々な文脈に現れる。ここでは「デハ」系接続語の後に続く発話、「デハ」発話がどんなものであるかを見てみたいと思う。そうすることにより、「デハ」が談話の中でどの様な機能を果たしているか、概観できるであろう。

ここでは「デハ」の機能を「解釈」「推論(伝達・確認・補充)」「態度表明」「転換」に分類する。

3-1 解釈

「デハ」発話を集めてみるとまず気付くのは、次の(13)「ノダ」(14)「ワケダ」などの説明のムードを表す形式や(15)の「トイウコトダ」などが多く見られることである。

(13) 三好「ベストスコアはどのくらいですか。私は最近、調子悪くて80台が出れば御の字ですけどね。」

山口 「じゃ、38、9で回ることもしばしばあるんだ。」(『ピ』)

- (14) 宮本「最初に入ったのは市立の病院の大部屋だったんです。そして、病室にも牢名主がおりまして、十五年もいるつわものなんですわ。ところがそこに十日いるあいだに、僕が牢名主になっていたんです。(中略) 出るとき『はよ元気になれよ』なんてみんなに見送られて、十日しかおらへんのに、なんとなく去りがたかった思い出があります。」

宮尾「じゃ、たった十日で牢名主にとってかわったわけ。たいした実力やわ、それは。」 (『メ』)

- (15) 宮本「現在は経済企画庁へお勤めなんですね。これはどういうことですか。」

半田「親元は建設省なんですけど、いまは出向しているわけです。」

宮本「すると、半田さんの公園づくりの役割は一応終ったということですか。」 (『メ』)

相手の話から新しい情報を推論によって引き出すということは、時には、相手の話を自分なりに解釈し直すということになる。ちなみに上に挙げた例において「デハ」系接続語はいずれも「ツマリ」との置き換えが可能である。このような「デハ」は「換言」の発話に現れる「ツマリ」とかなり近い機能を持っていることがこれによってわかる。そこで「デハ」の機能のひとつとして「解釈」という機能を認めることにする。

3—2 推論の伝達・確認

「デハ」系接続語の現れる発話が、基本的に話し手の推論の結果を相手に伝達する機能を持つことはその本質から容易に想像される。

- (16) 西川「何年生まれでございますか？」 (『メ』)

宮本「僕は昭和二十二年なんです。」

西川「じゃ、僕、ひとつ上になります。」

また、単に推論の内容を伝達するだけではなく、それに対する聞き手の反応を求めるものも多く見られる。聞き手側の応答も含め、いくつか例を掲げよう。

まず、判定要求の疑問文の場合。

(17) 渡辺「あなたはああいうの、演技だと思ってるんですか。地だと思ってるんですか。」

加賀「地はないですね。私ぐらいの年になると、いま、四十歳ですけど……。」

渡辺「じゃ、十八年生まれ？」

加賀「ええ。」

(『12』)

上の例で、話し手渡辺は聞き手である加賀の生年を当てようとしているわけだが、このような場合、話し手は自分の推論の当否を聞き手に問い掛けているのだと考えられる。

次に、仁田(1987)が疑似疑問とする種類のもの。

(18) 渡辺「いつも安定しているというのは魅力が減っちゃうんだよ。刺激がね。」

名取「じゃ、結婚は間違ってもしないほうがいいですね。」

渡辺「自分に自信があって、一人で生きていけるんなら、無理にすることはないだろうな。」

(『12』)

(19) 向田「私はパンがだめでして。」

阿川「じゃあヨーロッパでお困りでしょう。」

向田「いいえ。あちらのパンならおいしくいただけるんです。」

(『向』)

このような発話が現れるのは、推論の基礎になった前提が直前の発話者、すなわち現時点の聞き手の提供した情報であることに関係がある。つまり、その情報に関する責任は相手の側にあるため、「情報のなわばり」(神尾1990)や「聞き手の情報に対する配慮」(森山1989)を勘案せねばならない。それゆえ「ネ」や「ダロウ」を末尾にともなう発話が多いのである。⁸⁾

3-3 推論の補充

他に補充要求表現(仁田1987)、いわゆるWH疑問文も多く出現する。

(20) 「佐野さんの旦那ははっきり言うよ、おまえがしたって」

「あの家は何かあっても、私のうちのせいにするのよ」

「じゃ、誰がしたんだ？」

(『金』)

再び妻と夫の会話で、議論の焦点は近所のゴミの始末をきちんとしなかった犯人は誰かということである。夫は「妻が犯人だ」と信じているので妻を責めるのだが、その信念は妻の発話「あの家は…私のうちのせいにするのよ」により崩壊する。そこで夫は「Xが犯人だ」という推論をXを空欄にしたまま、妻に示し、空欄を補充するように要求しているのだと解釈することができる。空欄Xを埋めるのに最も相応しい人物はほかならぬ信念を打砕いた対話の相手、妻である。そこには仮説を否定するからには、事実はどうであるかを明らかにして責任を取れ、というような含みがある。「じゃ」を削除して「誰がしたんだ？」だけにすると相手の発話を無視しているようなニュアンスが出て、非常に不自然になる。

3-4 態度表明

推論の結果を基に自分の態度を決定しそれを伝達する発話も「デハ」の後に多く出現する。例えば意志を表すもの

- (21) 宮本「マルセさんのことを知ったきっかけは、ある出版社の編集者がマルセさんのライブを覗きに来て、教えてくれたんです。(略) 宮本さん、ぜひ一度ご覧になったらいいですよ。そう言われましてね。」
 マルセ「じゃあ、いまからやりましょう。」 (『メ』)

や、命令・依頼の形式

- (22) 一郎は眠ってしまった粹を抱いていた。

「眠っちゃったの？」

「ええ……」

「じゃ、そのまま寝かせて下さい、部屋のベッドで……」 (『金』)

が頻繁に見られるのである。これらは「態度表明」の発話としてひとつにまとめることができよう。

また、既出だが、ごみの置場所についての話し合いの場面 (11) にも態度表明の発話が見られる。

- (11) 言い争いになりそうになったので、みどりが慌てて言った。

「じゃ、いいわ。置場所、うちの前でいい、それでいいわよ」

(『金』)

「いいわ。」という発話により話し手は「ごみの置場所はうちの前でいい」と承諾している。このようなものも「態度表明」の一種と考えられる。

3-5 転換

すでに述べたように「デハ」の機能には「転換」にかなり近いところにあるものも存在する。この場合の特徴は「デハ」の後に「始メル」「終ワル」や「次ノ……」のように局面の変化を明示する形式が来ることである。

(1) a では, 次のニュースです。

b では, ただ今より会議を始めます。

ただし、中には㉓のように「態度表明」と区別が付きにくいものもある。

㉓ A 「全員揃いました。」

B 「だったら, そろそろ始めます。」

「転換」と「態度表明」の違いは「デハ」系接続語の後に来る発話が局面の変化を「宣言する」という遂行的な性質を持つかどうかという点にある。㉓の場合、Bの発話は開会の宣言とは理解しにくい。一般に㉓のように直前の発話の直接内容を前提とした推論の場合には「態度表明」と解釈されやすく、(1)の各例に見られるように状況の変化という非言語的情報の入力に応じて生じた「デハ」発話には、局面の変化の宣言とみなすのが適当なものが多い。「転換」の機能を持つ「デハ」としては、非言語的情報の入力がある(1)のようなものだけを認めることにしたい。

さて、少々脱線になるが、他の「転換」の接続語と「デハ」の相違に簡単に触れておいたほうがよいだろう。話題の転換の場合に現れる接続語としてよく用いられるのは「トコロデ」である。

㉔ 「決めたわよ、家政科に」

(略)

「へえ。家政科かあ。」

こういう時に何をいっても、どうせ姉は聞こうとしないのだ。

「ところでさ、 } お母さんだけどさ」
 「??じゃあさ、 }

「なによ？」

「浮気やめさせたよ。」

(『岸』)

- (1) a { では, } 次のニュースです。
 { ??ところで, }

それぞれの「トコロデ」を「デハ」と置き換えると非常に座りが悪くなる。その理由として考えられるのは、第一に「トコロデ」が宣言的発話とは馴染まないことである。「トコロデ」の後には新しい話題が提示されるのであり、変化の局面を宣言することはできない。

また、もうひとつの違いは「デハ」が必ず何らかの情報を受けているのに対し、「トコロデ」は情報を受ける必要がないことである。それで、「トコロデ」による転換の場合には話し手が自分の意思で話題の転換をコントロールしている感じが強くなる。時には無理やり話を変えたような感じさえ与えるのはそのためである。

4 「デハ」系接続語の諸相

ここまで議論を簡単にするために「デハ」系接続語をひとまとめにし、「デハ」をその代表として話を進めてきた。しかしながら、「デハ」系接続語の構成員を各論的に見ていくと、その構成素たる助詞、接続助詞の違いに応じ相違点が見られる。

「デハ」系接続語のうち「バ」をその構成素に含むもの以外は「デハ」「ダッタラ」「ソレナラ」「スルト」のようにすべて発話と発話を繋ぐ形式になりうるのであるが、⁹⁾後続の発話には明らかに異同が見られる。佐治(1975)はそれぞれの接続詞が後の文においてどれだけの展開を導きうるかという可能性を接続詞の「可展性」と呼び、接続詞の種類によって可展性に強弱があることを指摘しているが、くわしい検討は今後の問題として残している。そこで、「デハ」系接続語それぞれの可展性を調べてみることにする。

「すると」は「意志」や「命令・依頼」の発話の前には用いられない。

(21) *すると、いまからやりましょう。

(22) *すると、そのまま寝かせて下さい。

また「ダッたら」と「ナラ」は、非常に似通った可展性を示し、ともに転換の発話には現れない。

(1a)' *なら¹⁰⁾, 次のニュースです。

(1b)' *だったら, ただ今より会議を始めます。

以上のような「デハ」の機能の分類とそれぞれの形式の「可展性」を対応表にすると次表のようになる。

		接 続 語			機 能
		スルト	ダッたら/ナラ	デ ハ	
後 統 発 話 の 特 徴	「ワケダ」「ノダ」 「トイウコトダ」	○	○	○	解 釈
	平 叙 文	○	○	○	推論の伝達
	「ネ」「ダロウ」 判定要求表現	○	○	○	推論の確認
	WH疑問文	○	○	○	推論の補充
	意志 命令・依頼 その他 (「いいわ」等)	×	○	○	態度表明
	「始メル」「終ル」 「次ノ」など	×	×	○	転 換

5 結 論

小論では「デハ」及び類義の接続語の機能を分析した。「デハ」の本質的な機能は推論であるが、そこから派生して解釈、推論の確認・補充、態度表明、転換などの機能を有している。

接続語が談話の構造にどのように関わっているのかを解明するためには形式のひとつひとつの機能を細かく分析して行くことが必要である。小論で示して来た分析はそのひとつの試みであるわけだが、このような分析を今後、接続表現全体に押し広げていかなければならないと考えている。

【付記】

小論の一部は第2回日本語文法談話会（1988年12月4日，国立国語研究所）において発表したものである。席上，たくさんの方から貴重な御意見をいただいた。ここに記して感謝したい。

この研究を始めるきっかけとなったのは，寺村秀夫先生も御出席だった演習の発表である。「こないだのん，あれから進んでるか。」という先生の声は今も耳に消えない。今は遠くなくなってしまわれた寺村先生のもとにこの論文をお届けしたい。

注

- 1) 「一ならば」「一たらば」はそれぞれ「ナラ」「タラ」と同じ統語的条件の下で使うことができるので，「ナラ」の変種であるとし，「バ」とは分けて考える。
- 2) 「デハ」は「それでは」の一部であり，厳密に言うと条件節からなる他の接続語とはいささか性格が違う。しかしながら，「テハ」が「ナラ」「タラ」「ト」などと平行性を持つこと等も考え合わせると，「デハ」を条件節系接続語と并列に扱うことは妥当であると思われる。
- 3) もちろん既知の情報であっても意図的に知らない振りをして「なるほど」「そうですね」を発話する可能性はあるが，ここでは虚実の違いは議論に影響を与えない。
- 4) (6)の「デハ」は後に例示する非言語的情報の入力をきっかけとしているもので，直前の発話を受けているのではない。
- 5) 「では」と「だから」の違いについて考えるには，Akatsuka (1983, 1985, 1986) および坂原 (1989) の「ナラ」と「カラ」についての一連の論考が参考になる。紙幅の関係上，詳しくは別の機会に論じたいが，「ダカラ」には新情報の入力時に用いられるものと旧情報の入力時に用いられるものの2種類が認められることには注意したい。その点で，筆者の考えは坂原 (1989) の立場に近い。
- 6) 「独話」は人によっては聞き手の存在を前提としない「ひとりごと」の意味で使っているが，ここではいわゆる「一人語り (monologue)」のことである。
- 7) 接続語の「機能」ということについて私見を述べておきたい。接続語はそれ自体が意味を持っていて発話の接続のしかたを規定しているのか，それとも連接する発話の間にすでに関係が成立しているのかという問題については古くから議論があるが，筆者は，発話と発話の間には潜在的な関係の意味が成立しており，その関係の意味を体現するのが接続語だと考えている。接続語があっても無くても成り立つような発話の接続が存在することがその証拠である。

ゆえに

一生懸命勉強した。() 60点だった。

のように「だから」「けれども」等，ふたつ以上の接続語があてはまるような文

脈は、複数の意味解釈を許す多義的な文脈であると理解すべきである。つまり、接続語は文脈によって要求されるのである。

したがって、以下の議論で『「デハ」は『態度表明』の機能を持つ』などと言う時、「デハ」がなければ態度の表明が行われないのかと言うと決してそうではなく、むしろ「態度表明」が行われている文脈では「デハ」が用いられるという程度の消極的な意味に「機能」を用いている。

- 8) 確認の機能と解釈の機能のふたつは同時に現れうる。例④参照。
- 9) 「バ」条件節に由来する「そうすれば」という形式は発話と発話を繋ぐ「デハ」系接続語として現実に存在しない。その理由は「バ」条件節の持つ特殊性に由来するものと推察されるが、ここでは詳しく触れない。
- 10) ただし関西方言では「ナラ」の系列の接続語（共通語の「ソレナラ」に対する「ホンナラ」「ホナ」等）を「転換」として使うことができる。

用例出典

ビ＝『ビッグトーク』文藝春秋編 文春文庫

岸＝『岸辺のアルバム』山田太一 角川文庫

金＝『金曜日の妻たちへⅡ』鎌田敏夫 角川文庫

12＝『12の素顔—女優問診—』渡辺淳一 角川文庫

向＝『向田邦子全対談』向田邦子 文春文庫

メ＝『メインテーマ』宮本 輝ほか 新潮文庫

若＝『若者たちの神々Ⅱ』筑紫哲也 新潮文庫

一部、かっこを加えたものがある。また、注記のないものは作例。

参考文献

- Akatsuka, N. (1983) Conditionals, *Papers In Japanese Linguistics*, 9 : 1-33.
- Akatsuka, N. (1985) Conditionals and epistemic scale. *Language*, 61 : 625-39.
- Akatsuka, N. (1986) Conditionals are discourse bound. In Traugott, E. C. et al (eds.), *On Conditionals*, 333-351. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, M. A. K. & R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 蓮沼昭子 (1990) 「対話における「だから」の機能」第4回日本語文法談話会レジューム
- 市川 孝 (1962) 「文章論」文化庁(編)『国語シリーズ 国語教養編7 文章表現法の問題』(『覆刻文化庁国語シリーズX 文章の構成・表現』(1975) 教育出版に再録)

- 市川 孝 (1965) 「文章論と方法」時枝誠記・遠藤嘉基 (編) 『口語文法講座 1 口語文法の展望』明治書院
- 井出 至 (1973) 「接続詞とは何か—研究史・学説史の展望—」鈴木・林 (編) 所収
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわばり理論』大修館書店
- 北野浩章 (1989) 「「しかし」と「ところが」—日本語の逆説系接続詞に関する一考察—」『言語学研究』8
- 宮地 裕 (1983) 「二文の順接・逆接」『日本語学』2-12
- 森岡健二 (1973) 「文章展開と接続詞・感動詞」鈴木・林 (編) 所収
- 森山卓郎 (1989) 「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報配慮・非配慮の理論—」仁田義雄・益岡隆志 (編) 『日本語のモダリティ—』くろしお出版
- 仁田義雄 (1987) 「日本語疑問表現の諸相」小泉保教授還暦記念論文集編集委員会 (編) 『言語学の視野 小泉保教授還暦記念論文集』大学書林
- 佐治圭三 (1975) 「接続詞の分類」『月刊文法』2-12
- 佐治圭三 (1987) 「文章中の接続語の機能」山口明穂 (編) 『国文法講座 6 時代と文法—現代語』明治書院
- 坂原 茂 (1985) 『日常言語の推論』東大出版会
- 坂原 茂 (1990) 「談話研究の現在と将来」『月刊言語』19-4
- Schiffrin, D. (1987) *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Stubbs, M. (1982) *Discourse Analysis*. Oxford: Basil Blackwell.
- 鈴木一彦・林巨樹 (編) (1973) 『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院
- 鈴木一彦・林巨樹 (編) (1984) 『研究資料日本文法 4 修飾句独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院
- 山森良枝 (1990) 「接続詞の二類型と談話の情報構造—「つまり」と「だから」を手がかりに—」『日本語学』9-5

(文学部日本文学科助手)